

## 二 月 の 天 象

### 太 陽

月始めは寶瓶宮に在りて20日より雙魚宮に入る。

| 日  | 赤經     | 赤緯      | 星座  | 視直徑    | 北極の傾  | 赤道の位置 |
|----|--------|---------|-----|--------|-------|-------|
| 0  | 20時52分 | 南17度35分 | 山羊座 | 32分32秒 | 西へ12度 | 北へ6度  |
| 10 | 21 33  | 14 34   | ク   | 32 28  | 16    | 7     |
| 20 | 22 12  | 11 10   | 水瓶座 | 32 25  | 19    | 7     |

太陽の自轉軸は今後益々西へ傾いて、月末には北極は20度近く西へ傾むく。更に赤道は、太陽の視中心より北側7度の所を通つてゐるので、太陽の南極が一番よく見える頃である。従つて黒點が太陽の自轉に依り太陽面上を動く様に見える有様は、決して直線にならず、最も灣曲した曲線を畫いて移動する様に見える。

### 月

| 月の相   | 時刻            | 星座   | 視直徑    |
|-------|---------------|------|--------|
| 下弦    | 1日午後11時10分24秒 | 天秤星座 | 29分55秒 |
| 新月    | 10 午前 2 55 6  | 山羊   | 30 23  |
| 上弦    | 17 午前 9 22 30 | 牡牛   | 32 14  |
| 満月    | 24 午前 3 58 36 | 乙女   | 31 57  |
| 遠地點通過 | 4 午後 5 30     | 蝸    | 29 33  |
| 近地點通過 | 20 午後 3 30    | 双子   | 32 35  |

月は 5 日午後 7 時頃土星の南を通り過ぎて、9 日の正午過ぎに水星のすつみ南を横ぎり、13日午前10時に天王星の南を過ぎ、續いて同日午後 5 時には金星に出合ひて矢張りその南を通り過ぎる。更に15日には午後 4 時40分木星の直ぐ南を通り、次いで19日午前 5 時過ぎには火星と非常に接近するので面白いのであるが相憎く、此の時は日本からは見えない。最後に23日午後三時に海王星の北側を過ぎて、今月の遊星歴訪を終る。

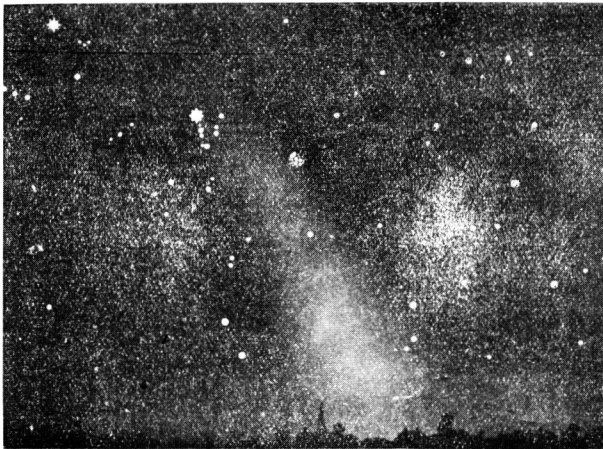
### 火 星

|     | 赤經    | 赤緯      | 視直徑   | 光度    | 距離    | 光達時間  |
|-----|-------|---------|-------|-------|-------|-------|
| 6日  | 5時23分 | 北26度20分 | 11.1秒 | 負0.2等 | 0.842 | 6分59秒 |
| 16日 | 5 30  | 26 15   | 10.1  | 正0.1  | 0.930 | 7 44  |
| 26日 | 5 41  | 26 11   | 9.2   | 正0.3  | 1.002 | 8 30  |

## 黄 道 光

黄道光の観望には今月が最も都合がよい。既に先月には其の光度は銀河に比適し、頂點は木星近くまで延びてゐた。観望上の注意は本年一月號の通りであるが、月光があつては駄目であるから、今月も10日頃までがよい。只だ、金星と木星とは輝きが強いので、可成り邪魔になるが、手か何かで其の光をさへぎる様に工夫したらよいであらう。又た單に見る丈でなく、其の形狀を星圖上に記入して、毎日の形、光度、色等の變化を見る面白。殊に、此の観測には望遠鏡等が不用であるから、素人でも少し馴れれば、學術上價值ある観測を爲す事が出来る。観測を記録する要領は、(1) 観測せる年月日時、(2) 観測地、(3) 観測者、(4) 黄道光の外形を星圖に記入、(5) 光の強さ(或は明らかとか或は弱いとか)、(6) 其の時の天氣狀態(雲の有無等)、(7) 注意事項、等を記録すれば一つの立派な観測報告となる。會員諸氏の内、観測報告を本會へ送つて下さる熱心家には、観測用星圖を無代で進呈する筈。

此の黄道光と類似の現象なる對日照も、今後4月頃までは見える事と思はれるが、其の光度が非常に弱いので、空氣のよく澄んだ、燈火の眼に入らない所でなければ駄目であらう。此れの観測も黄道光と全く同様の要領でやれるから、観測をおすすめする。此の對日照の形は1月には小さく長く2月には非常に大きく圓く、3月には大きく圓く、4月には大きく稍長いと云つてゐる人もある。現はれる位置は太陽の正反對の附近である。



西 天 の 黄 道 光

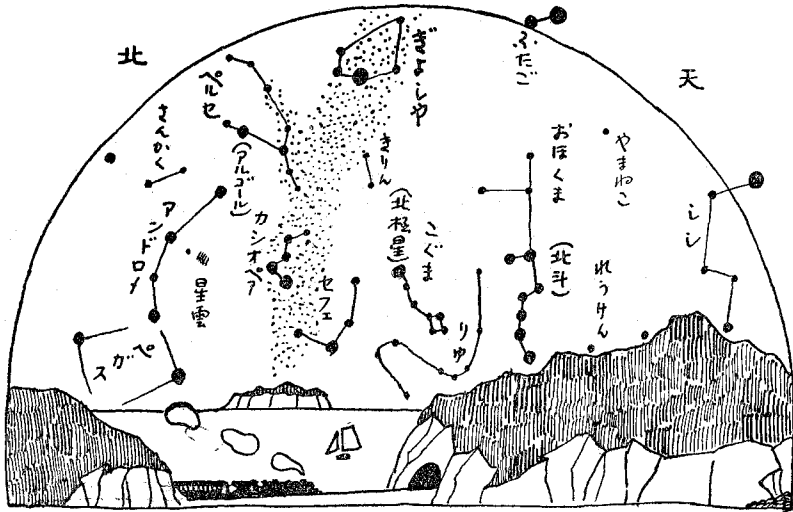
水星 は7日午後1時に太陽に内合さなるので、其の前後觀望出来ない。併し19日の留の頃からは、次第に太陽より遠ざかり觀望に好都合となつて、來月始めの西方最大離角は本年中で最も大なる27度さなるので、月末になる程時季はよくなる。併し曉の東天であるから、早や起きの人のみ、見得る。月末の視直徑は7秒半、光度は正0.6等級。

**火星** 夕方天頂に近く、観望にはよいが視直徑は大分小さくなった。

**土星** は曉の星、射手座の西端に位する。視直径14秒。光度正0.7等。

**天王星** 8日午前10時、金星と合となり金星の南2度の處に在る。

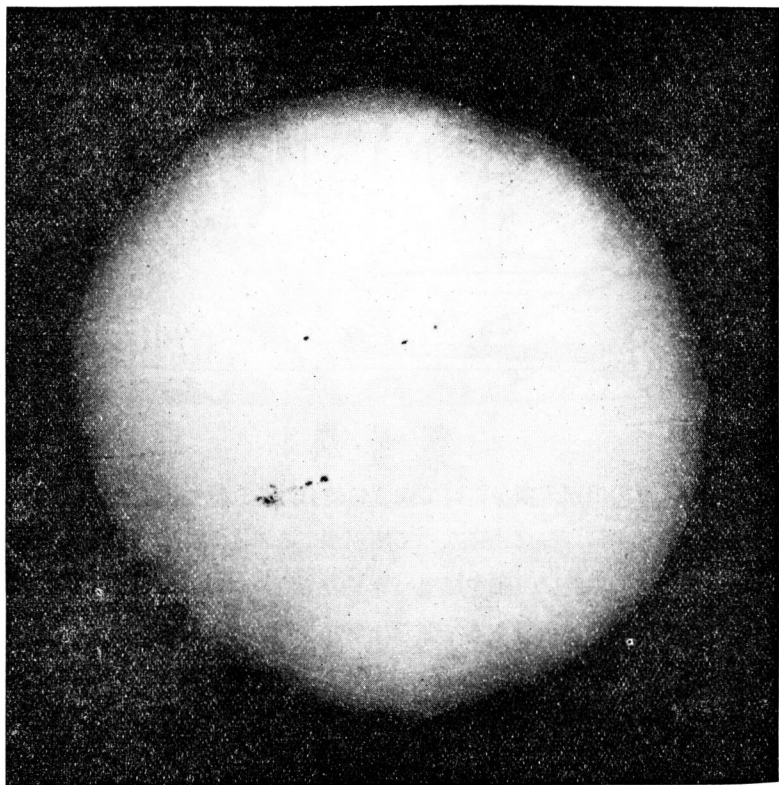
**海王星** 宵の東天にあり、19日正午に太陽と衝、視直徑2.5秒(最大)。



## 恒星界

丁度、天の川が天頂を貫いて南北に流れ、天の最も美しい部分が、南半分の天空に、一ぱいになつて擴がつてゐる。寒風に吹きさらされた漆黒の空に、鋭い、刺す様な一等星のきらめきは、如何にも嚴冬の夜にふさはしい景色である。即ち、ポルツクス、アルデバラン、ペテルギウス、ベラトリックス、リゲル、プロシオン、シリウス等は南の空にがんばつてゐる、東の空には既にレグルスが現はれ、緯度の低い地方では、更にカノプスも見ることが出来る。此等一等星の間には、數多の星雲や星團が散在してゐるのみならず、遊星界の大立物たる木星や、昨年末の空を賑はした火星が點在する。更に西空には魔の如き黄道光の怪異な光の中に、「美の神」金星が安らかに坐してゐる。

北の方では北斗七星が垂直になつて、北極星を中心にして、カシオペアと相對してゐる。ベガスは地平線に半ば没して、アンドロメダがこれに續き、東からは「れうけん」「しし」等が登つて来る。天頂には「ぎよしや」と「ふたご」が位置を占め、ペルセのアルゴールもまだ暫らくは觀望出来る。



1928年7月7日9時59分撮影 上の黒點群が肉眼に見えたもの、プリントの拙づかつた爲、非常に見にくくなつたのは残念だつた。